

日本フォーラム

小澤徹

早稲田大学先進理工学部応用物理学科

本稿は平成 26 年（西暦 2014 年）国際数学者会議(International Congress of Mathematicians(ICM))開催期間中の 8 月 19 日にソウル国際会議・展示場(COEX(Convention & Exhibition))で行われた日本フォーラム(Japan Forum)についての記録である。

ICM は 4 年に 1 回 9 日間に亙り開催される世界最大の数学者会議であり、総合講演(plenary lecture)を始め、分科会(section)毎の招待講演(invited lecture)や一般講演(short communication)などの講演のほか、フィールズ賞(Fields Medal)やガウス賞(Gauss Prize)などの受賞者の発表や受賞記念講演会、その他、数々の催し物が行われる集会である。今年はその年に当たり、8 月 13 日から 21 日まで大韓民国ソウル特別市江南区で開催された。

ICM の主催は国際数学連合(International Mathematical Union(IMU))である。IMU は数学に於ける国際協力の推進を目的とする国際的非営利非政府組織であり、加盟国(Member Country)は 83 か国(そのうち 10 か国は準加盟国(Associate Member))に上る。国により加入組織(Adhering Organization)が異なり、科学アカデミーの場合もあれば数学会の場合もあり様々である。我が国の加入組織は日本学術会議(Science Council of Japan)であり、数理科学委員会 IMU 分科会が直接の担当部署となっている。IMU 分科会は、IMU 本部事務局の活動に迅速に対応する為に、平成 24 年に設置された分科会である。それ以前の IMU の運営に関する国内委員会は日本学術会議数理科学委員会本体が担っていた。平成 24 年 1 月からの委員は(敬称略)、石井志保子、岩崎克則、岡本和夫、柏原正樹、小谷元子、中村佳正、平田典子、三輪哲二、室田一雄、小澤徹(委員長)の 10 名である。

本分科会の設置以来、IMU に於ける我が国の存在感の一層の充実が重要な課題であり、その為の活動の具体案の一つとして「日本フォーラム」構想が議論されたのは平成 25 年 10 月の第 3 回の会議であった。この議題を取り上げたのは、英米仏を始めとする数学大国は ICM 期間中の一晩を選び、歓迎会(reception)を開いて各国の代表者や各種受賞者を招待し、国際交流の場を設けている一方で、我が国ではそうした取り組みを一切して来なかった事が判明したからである。構想の意義に就いては共通の理解が得られたものの、実施計画、実働部隊の編成、資金調達、その他検討すべき問題が次々と浮上した(何かを初めて実現しようと計画するとき、初期の段階から、困難な問題、出来ない理由、参加しない理由、失敗したらどうするのか、と云った細かい配慮を下さる方々が必ずいらっしゃる、誠

に有難く、ここに感謝申し上げます。) 議論の末、兎も角やってみようと言う事となり、小谷元子委員を通じて日本数学会理事会に協力を仰ぐべく諮ってもらった事にした。理事会での議論の詳細に就いては幸いにして知らないが、何回かの意見交換を経て IMU 分科会と理事会との協力体制が平成 25 年の末頃には何とか整備された。

具体的な準備計画は舟木直久理事長と石井志保子委員と共に三人体制を中心に立案し進めて行った。その際、中村玄・仁荷大学校 (Inha University) 教授を通じて入手した、ICM2010 に於ける韓国の歓迎会準備のためのスケジュール表は大変参考になった。資金調達では前田吉昭先生にもお世話になり、最終的に、一般社団法人 東京倶楽部と一般財団法人 数理科学振興会のご援助を戴く事が出来た。IMU 分科会は日本学術会議の下部組織であり、日本学術会議は内閣総理大臣 (内閣府) の所轄である以上、資金集めの先頭に立つのは問題ではないかとの有難いご指摘を受け、助成申請書類は全て舟木理事長の名前で提出する事となり、舟木先生始め日本数学会事務局に全面的にお世話になった。当日のご来賓として在大韓民国日本国大使館の方をお迎えするに当っては、石井先生に全面的にお世話になった。その他の祝辞を戴く予定の方々には個人的に直接お願いして、全員の快諾を得た。特に IMU 次期総裁の森重文先生には早い段階で確約を取っており、日本フォーラムの注目度は一気に上るだろうと期待してはいたが、上記の通り、本計画は次期 IMU 体制とは全く独立に進められたものである。

一方、主催者をどうするのかと言う問題は、当初、重要とは思わなかったが、その後この問題には繰り返し悩まされる事となった。結局、日本数学会と IMU 国内委員会との共催とし、日本学術会議は後援と云う形での開催となった。この件では、楠岡成雄日本学術会議数理科学委員長、舟木直久日本数学会理事長はじめ関係者の方々には、一方ならぬご配慮・ご支援を戴いた。

個人名を入れた招待状はメールに添付し、約一か月前から IMU 総会 (8 月 10 日から 11 日) 直前まで、一人一人個別に送信した。送付先は IMU 総会参加者、ICM 総合講演者、ICM2014 組織委員・関連委員会委員を中心に計 400 名以上で、参加希望者には確認メールを出したり、個別の質問や要望などに応じた為、こちらから送信したメールは計 650 通以上となった。IMU 総会参加者のリストは、日本フォーラム招待以外の目的では用いないという条件を提示した上で、Gröetschel IMU 事務総長から入手した。ICM 開催直後からはフィールズ賞等の受賞者全員にも招待状を一人一人個別に送付した。その他の一般参加希望者には個別に対応した。招待状の作成に当っては、坪井俊元理事長から戴いた ICM2010 に於ける英米仏等の歓迎会の招待状の写しが大いに参考となった。

さて、日本フォーラムのプログラムは最終的に次の様になった。手許の資料をそのまま掲載する。

ICM 2014 Japan Forum

Tuesday, August 19, 2014

Grand Ballroom 104, COEX(venue of Seoul ICM 2014)

Program

Moderator : Shihoko Ishii
Member, Science Council of Japan
Professor, University of Tokyo

19:00 Opening Address

• Tohru Ozawa
Chair, Japan National Committee for IMU
Professor, Waseda University

• Ingrid Daubechies
President, IMU

Congratulatory Address

• Koro Bessho
Ambassador Extraordinary and Plenipotentiary of Japan
to the Republic of Korea

Toast

• Shigefumi Mori
President-elect, IMU
Professor, Kyoto University

(Discussion)

19:45 Speech

• Hyungju Park
Chair, Organizing Committee for Seoul ICM 2014

• Myung-Hwan Kim
President, Korean Mathematical Society

20:15 Presentation : “Mathematics in Japan”

• Tadahisa Funaki
President, Mathematical Society of Japan
Professor, University of Tokyo

(Discussion)

20:50 Presentation : “ICM in Rio”

• Marcelo Viana
Chair, Organizing Committee for ICM 2018

21:00 Closing Address

• Shihoko Ishii
Member, Science Council of Japan
Professor, University of Tokyo

IMU執行部からはDaubechies総裁、Gröetschel事務総長はじめ、理事の殆んどに参加して戴く事が出来た。ICM関係では Park組織委員長、Kim大韓数学会会長、Viana次期ICM 2018組織委員長のご挨拶を戴いた。在大韓民国日本国大使館からは別所浩郎特命全権大使と宮本拓人一等書記官（科学官）のご列席を戴いた。進行役は石井志保子先生にお引き受け戴いた。主催者側の開会の辞は、日本フォーラムの趣旨と支援団体の紹介を中心とする簡単なものであったが、今回が初の試みである事を付け加えてしまった為に、IMU総裁には早速「ICMにおける日本フォーラムが今回で最後とならないように」との有難い祝辞を戴く事となってしまった。森重文IMU次期総裁の乾杯に伴うご挨拶は、堅苦しくなく、お人柄が滲み出る様な素晴らしいもので、場の雰囲気は大いに盛り上げた。Kim大韓数学会会長の祝辞では、日韓関係に就いての言及もあり、一瞬緊張した空気に包まれたが、「良い事も悪い事もあった。我々は良いものを見付け、良いものを発展させて行きましょう」と云った未来志向の結論であり、盛大な拍手を得ていた。舟木理事長のプレゼンテーションは、日本数学会の歴史・発展・活動紹介・今後の展開を中心とした簡にして要を得た内容であり、大変印象深いものであった。スピーチ以外の時間では、我が国の美しい四季の風景、各数学教室の校舎、小平邦彦先生、伊藤清先生はじめ我が国の誇る数学者の貴重な写真の数々を、スライドショーでスクリーンに投影した。これは好評であり、Springer本社のJoachim Heinze上級相談役からお褒めの言葉を戴いた。作成に関わった日本数学会の方々に、この場を借りてお礼申し上げる。

異国の地の国際会議場に在って、出せるものには自ずと限界があったが、会場関係者には相当協力して貰い、現地に於いても苦勞の末、良いものを見付けて取り揃える事が出来、期待以上の好評を得た。会話も弾み、良い出会いもあり、多くの参加者から感謝の言葉を戴いた。今後の発展に繋がる計画の種も相当仕込めたものと期待している。式次第も、最後の締めも込めて日本式に統一した事で、特徴が出せたと思う。フィールズ賞受賞者も含め、参加人数は200名を超え、盛況のうちにお開きとなった。この模様は、翌日のICMの日刊記事(Daily News, No.7)にも取り上げられた。

このような企画・運営は大変であるが、実に遣り甲斐のある仕事である。日本フォーラムは、我が国の数学の発展の為に、継続して行う価値の有る会合である。しかし、当然乍ら、時間・資金・協力者が不可欠であり、関係者の熱意と惜しみ無い協力が得られて初めて実現可能となる。上記の皆様のご協力・ご支援に改めて感謝申し上げますと共に、張良様始め日本数学会事務局の方々に お礼申し上げます。